

鎌倉時代の書写と推定される『法隆寺東院縁起』によると、八角円堂の夢殿で知られる東院伽藍は、聖徳太子が住まいした斑鳩宮跡地の荒廃を嘆いた僧行信が、東宮坊（皇太子御所の内政機関）に上奏し、天平11年（737年）に創立したという。この東宮（皇太子）とは、のちに孝謙・称徳天皇となる阿部内親王を指している。天平宝字5年（761年）の『上宮王院縁起并資財帳』（東院資財帳）には、天平9年（739年）、内親王の母、光明皇后が経典77巻と法華経の経櫃を奉納したとあり、また、「瓦葺八角仏殿一基」（夢殿）の本尊を、「上宮王等身観世音菩薩木像」と記している。光明皇后は、法華経を流布した聖徳太子への信仰が厚く、その信仰を阿部内親王も受け継いだのだ。

上宮王とは、聖徳太子の生前名だが、その等身像として造られた観音菩薩立像は、やがて聖徳太子信仰の高まりとともに、救世観音とよばれ、秘仏として扱われるようになる。白布に包まれた秘仏の救世観音像が、岡倉天心、フェノロサの手によって開扉されたのは、明治17年（1884年）のことだった。ただし、故高田良信・法隆寺長老によると、それ以前にも開扉されていた可能性があるという。明治元年（1868年）の神仏判然令、明治4年（1871年）1月の上知令により、領地を失った各地の大寺院が、堂宇の維持もままならず、貴重な仏像や宝物が散逸する危機に直面した。法隆寺もその例外ではなく、政府の求めに応じて、明治5年（1872年）、壬申調査と呼ばれる宝物の調査を受け入れたのだが、その際に、文部省の町田久成・蜷川式胤らが救世観音像を開扉していたのではないかというのだ。しかし、その真相は定かでない。

いずれにしても、壬申調査のあと、法隆寺とその宝物に対する関心が高まり、明治8年（1875年）4～6月、東大寺大仏殿・回廊で奈良博覧会が開催された際には、正倉院宝物と並んで、法隆寺からも多数の宝物が出陳された。しかし、なおも経済的苦境が続いていた法隆寺では、住職・千早定朝の決断により、宝物の保存・伝承をはかるため、明治9年（1876年）11月、綱封蔵に伝来した寺宝の献納を宮内省に申し出る。明治11年（1878年）、皇室への献納が認可されると、宝物332点が一括

して東京に運ばれ、これと見返りに、金1万円の下賜を受けたことで、ようやく、伽藍や堂宇の維持が可能となった。正倉院宝物と双璧をなす法隆寺献納宝物は、こうして、明治15年（1882年）、上野に開館した帝室博物館で展示公開され、戦後は、文部省の管理となって、今は、東京国立博物館の「法隆寺宝物館」で収蔵・展示されている。

その後、明治30年

「古社寺保存法」によって、古文化財の法的な保護が開始され、法隆寺では、一応の苦難は乗り越えたものの、諸堂や緒仏の修理に要した経費の支払いに苦しむ状況に陥っていた。そこで、明治40年（1907年）、寺僧と信徒総代の協議により、百万塔3,000基と屏風を信徒に譲与して、負債償却の資金を得ることになった。百万塔とは、天平宝字8年（764年）、恵美押勝（藤原仲麻呂）の乱で命を失った人々の菩提を弔うため、称徳天皇が製作を開始した木製の三重小塔で、『続日本紀』宝亀元年（770年）4月26日条に、完成した百万塔を諸寺に納めたと記されている。塔の中央には、世界最古の印刷物として有名な、根本・慈心・相輪・六度の陀羅尼が納められた。陀羅尼とは、漢字で印行された梵語の経文で、小塔を造り供養すればこの世から争いごとが消えるとされた。法隆寺、東大寺、西大寺など、十大寺に各10万基が安置されたが、その後の戦乱などで失われ、法隆寺にのみ約4万6千基が伝わった。

この百万塔の譲与については、内務省の許可を得たのち、明治41年（1908年）、信徒総代会の協議の結果、寺から直接希望者に譲与することとなり、塔・陀羅尼とも完全な第一種30基は35円、塔部分が破損した第二種は20円、両者とも破損した第三種は15円などと定められた。天理図書館の収蔵資料となっている木製小塔は、第一種に該当するが、譲与規定1枚が添えられていて、包み紙の宛名から、大阪市内居住の某氏に譲与されたものとわかる。百万塔の譲与によって得た浄財によって、寺の危機は再び救われたのだ。

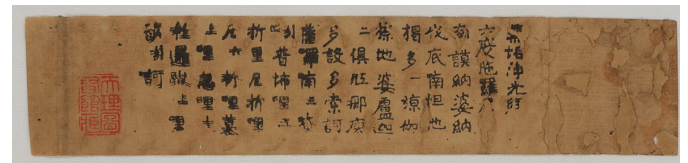


写真2 陀羅尼 (天理図書館蔵)

法隆寺にとってひとつの転機となったのが、大正10年（1921年）4月に執り行われた聖徳太子1300年御忌法要だった。7日間で約26万人という空前の参拝者を数えたこの一大イベントの奉賛会は、実業家の渋沢栄一が副会長を務めた。これにより、伽藍の大修理に対する機運が高まり、働きかけを受けた文部省が、国費を投じた国宝保存修理（10カ年計画）を決定し、昭和9年（1934年）4月、東大門、食堂、細殿の修理を開始した。こうして始まった昭和大修理では、昭和14年（1939年）、若草伽藍の発掘調査で金堂や塔が確認されたほか、東院伝法堂の解体修理では、下層の発掘調査で斑鳩宮の遺構と見られる掘立柱建物跡が見つかり、多量の炭や壁土が出土した。令和2年（2020年）、法隆寺の倉庫で、「伝法堂出土壁土」と書かれた木箱から、80年ぶりに発見された炭や焼けた壁土は、聖徳太子の没後、山背大兄王が受け継いだ斑鳩宮を蘇我入鹿が焼き討ちした証拠と見られ、最古の宮殿建築の部材として大変貴重なものだ。それらは、下層建物跡の石膏模型（昭和15年8月作成）とともに、斑鳩町文化財センターの秋期特別展「聖徳太子の足跡一斑鳩宮と斑鳩寺」で初公開された。

本年4月、聖徳太子の遠忌1400年を迎えるにあたり、近代の法隆寺が歩んだ苦難の歴史を改めて思い起こしておきたい。



写真1 百万塔陀羅尼 (天理図書館蔵)